



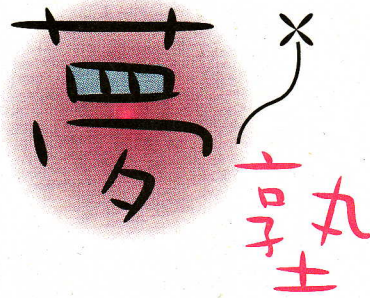
# 私だけの香水作り

幼い日に数度、かいだだけの香り。それが始まりだった。

伊倉延江さん(42)

が、まだ幼稚園児だったころ。祖父母までの3世代が暮らす東京・世田谷の自宅には、正月、盆、クリスマスと、何かと言えば親族が集まった。その中にお気に入りのお姉さんがいた。20歳前後の美人で、名は「みゆきちゃん」。彼女は、とてもいいにおいがしていた。なぜ? 「あれはね、香水って言うの」。そう誰かに教えられて以来、同じ香りを探している。

みゆきちゃんとはその後、会っていない。遠い親せきらしく、後に親に聞いても、居場所どころか誰のことなのかもはっきりしない。だから彼女の香水の銘柄も分からず、頼りは自分の鼻ばかり。年々こうなるく、様々な店であらゆる香水を試し、街や電車で似た香りを漂わせる女性が



いけば、声をかけて香水の名を尋ねた。が、たどりの着けない。

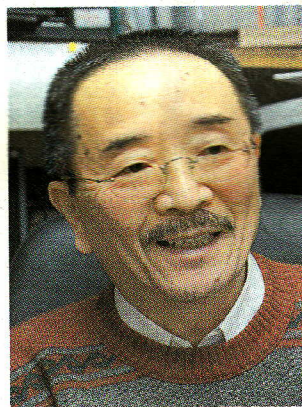
アロマセラピーに使う天然オイルで、自分だけの香水を作れると知ったのは、30歳を過ぎたころだった。けれど、花や木から抽出したオイル

の組み合わせだけでは満足できず、やがて、合成香料も含めた、より奥の深い香水作りに目覚めていく。

ほんの少し配合を変えるだけで、出来上がる香水はがらりと表情を変えた。失敗もしたが、自分のイメージに近づいた瞬間には心が躍った。「香りは自己表現の一つ。それを世界に一つだけの香りでできるなんて、本当にせいたく」

いつしか「理想の女性像」と重なった「みゆきちゃんの香り」は未完成だが、「だから楽しいのかもしれない。夢。香水作りは終わりのない夢。出合えて幸せです」。(村田雅幸)

2面に続く



立川一義さん

## 3つのアドバイス

たちかわ・かずよし 香水教室「香楽塾」主宰。大手化粧品会社に42年間勤務し、化粧品や香水を開発した。香楽塾では、簡単にオリジナルの香水を作れる調香キットも販売。<http://www.kosui.jp/>

### ✓1 気軽に始めよう

嗅覚が鋭いといった特別な才能を持たなくても、個人で楽しむのならば誰にでも香水は作れる。好きな香水を2種類、自分のセンスでブレンドするだけでも立派な調香。アロマセラピーで使うエッセンシャルオイル同士を組み合わせるのもいい。

### ✓2 使う

一つの香水でも、違いで、つけた直後とその後の「ミドルノート」と、時変化する。様々な香いなども知れば、表

# 「魔法みたい」自分を演出する創造的な芸術

初めてオリジナルの香水を作ろうとするならば、まずは人気の高い市販の香水、いわゆる「名香」を数種類混ぜ合わせてみるのがいいという。立川一義さん(65)いわく、「専門家の間では、出来上がった香水同士を混ぜるのはタブーとされるが、名香同士を合わせた場合、まずひどいものになることはない」。

方法自体は簡単だ。少しずつ配合を変えながら、徐々に理想の香りに近づけていけばいい。ただ、それが難しい。最初はなかなかイメージ通りにはいかないが、その試行錯誤が香水作りの面白さでもあるという。

名香は、複数の香料をフランスよく調香したものだから、もし、一から自分の香りを作りたいと思うなら、単一の成分でできた「合成香料」や天然素材から抽出した「天然香料」をブレンドする「単品調香」にチャレンジしよう。



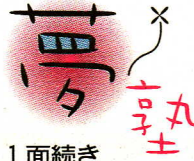
香料のひとつずつに思いを込める

この時に注意すべき点は「多くの種類を混ぜすぎないこと」。たくさん香料を混ぜると、特徴のない平板な香りになってしまうので、「まずは主役の香りを決め、そこに脇役の香りをいくつか加える。できるだけシンプルに、それぞれの役者がいきるよう心がける

ことが大事」と立川さん。ただ実際には、500種とも1000種とも言われる合成香料のどれを使えばいいのかを、素人が判断するのは難しい。また、合成香料は少量での購入が困難で、香水教室などを經由して入手するのが一般的だという。立川さんは、独自に

編み出した「名香方程式」で計算した配合でオリジナルの香水作りを指導、合成香料の一部も、自身が営む「香染塾」で販売する。「香水って魔法みたい」と、伊倉延江さんは言う。つける香水によって、自分を演出できるからだという。仕事なら、甘すぎない

は香りが生命維持に重要なものだったから」と話す。「香水作りを通して、香りの重要性を認識してもらいたいと思うんです。そして、香りの組み合わせでできる香水は、音楽や絵画と同じように、創造的な芸術であるとも知ってほしい」



1面続き



メンズっぽい香り、ロマンチックな気分浸りに浸りたければ、フローラルな香り。自分で香りを作れば、その演出の自由度は増していく。

また、ある香水をつけて突然、同じ香水をつけていた過去の出来事を思い出すことがあるのも、香水の楽しい効用の一つだという。

立川さんは「記憶と香りが深く結びつくのは、本来